

妖怪から考える地域活性化

2022年8月2日

愛知学院大学 経済学部 経済学科 3年 菅沼聡詞

私はマムシという生物に対し山田彊一氏が特別な想いがあるのではないかと、または、マムシが狐などのように妖怪として昔からの言い伝えがあるのではないかと疑問に思った。理由は、2つある。

1つ目は、『名古屋・妖怪三十六景』の表紙には山田彊一氏描いた妖怪・六所社マムシの絵が載っているためだ。妖怪・六所社マムシとは、六所神社の参拝土産である竹の棒にテニスボールほどの餛が巻き付いた「カッチン玉」という餛がモチーフになっており、「カッチン玉」とマムシを合わせた発想から生まれた妖怪である。表紙に選ばれるくらいなのでもちろん、その絵は異彩を放っている。

2つ目は、妖怪・光友カラス天狗という妖怪の絵にもマムシは登場するためである。当時大学生になったばかりでお金も無かった山田彊一氏が、初めて寄った名古屋駅前の骨董屋で目にした、30 cm程のカラス天狗のお面をモチーフにした妖怪である。妖怪・光友カラス



天狗の右手を見るとマムシを持っているのである。

そこで私は山田彊一氏に直接聞いてみた。

幼稚園の時、尼が坂で蛇を見つけ、当時その蛇をマムシだと思い、調べてみると、蝮ヶ池八幡宮というマムシ神社を見つけた。やはりあれはマムシであろうと考えたところからマムシを妖怪街道へ入れたと言う。

この回答から、「マムシが妖怪である」と言う古くからのいい伝えから絵画で具現化させたのではなく、山田彊一氏自身がマムシという不気味なイメージを実際の名所や特産物などに合わせ、オリジナルで妖怪に見立て作ったものだということが分かる。また「妖怪は、定着したら真実」この言葉はまさに、妖怪の真理をついているだろう。誰も妖怪を見たことは無いはずであるのに、河童は本物、妖怪・六所社マムシは山田彊一氏オリジナルという感覚があるのは私だけではないはずである。山田彊一氏はこう語った。

「美術は想像の世界、妖怪も結局想像。」

山田彊一氏自身も、海外に行った場合、日本で売れるような綺麗な絵は気にも留められないため、自分の絵を売れる絵から人間の心を現した絵画へシフトチェンジした。

このように、考えると、名古屋は、歴史がある都市であるので、土地や名前を少し調べるだけでも、老若男女誰でも知る有名な人物と関わりのあることを調べることが可能である点から、想像する力があれば、山田彊一氏ではなくても名古屋妖怪を作ることは可能である。ましてや、妖怪だけでなく、どの都市もしたことないイベントを作ること、名古屋の地域活性化に繋がるのではないかと感じた。